

甲虫コレクションガイド 17 北九州市立自然史・歴史博物館の甲虫標本

蓑島悠介

〒 805-0071 北九州市八幡東区東田 2-4-1 北九州市立自然史・歴史博物館

Beetle Collection of Kitakyushu Museum of Natural History and Human History, Kitakyushu, Japan

Yūsuke N. MINOSHIMA

はじめに

北九州市立自然史・歴史博物館は、自然史・歴史・考古の3つの市立博物館を統合した総合博物館として、2002年に開館した。自然史部門の前身となる自然史博物館は、1981年に国鉄八幡駅ビルを仮施設として開館し、現博物館の開館まで21年間の仮開館時代があった。八幡駅ビルには、かつて恐竜がいたのである。2013年3月に、市政50周年と開館10周年を記念して一部展示部分をリニューアルオープンし、年間入館者数は50万人前後となっている。なお、館やコレクションの概要は蓑島(2014)で紹介している。

昆虫標本収蔵庫(図1)の床面積は238 m²で、中二階の構造のため、実際には1.5倍以上のスペースを有している。標本の多くはコレクター各氏からご寄贈いただいたもので、ドイツ箱およそ9,000箱、60万点以上を収蔵している。タトウや三角紙を含めるとさらに増えるものと思われる。筆者の前任者で、現館長である上田恭一郎博士の研究分野が鱗翅目であったことから、国内外の鱗翅目が数・面積共に多くを占め、イノレスボルネオフタオシジミ *Sukidion inores* (Hewitson, 1872) といった希少

種から北九州市のモンシロチョウまで、展示・研究双方に用いることができる標本が質・量ともに充実しており、タイプ標本も保管している。とはいえ甲虫標本が全くないわけではない。当館は受け入れ数量をコレクション単位で計数しているため鞘翅目のみのカウントはしていないものの、これまでの受入記録を足し合わせた推定から、少なくとも10万点は収蔵しているものと思われる。多くの標本は劣化や破損を避けるために常設展へは出さないが、昆虫では特段の希望がない限り、寄贈いただいた大型コレクションは、少なくとも一部を、一度は特別展等で展示したいと考えている。

当館の収蔵庫はすでに満杯となっているため、鱗翅目など当館に充実している分類群については、正直なところ受け入れが難しい場合が多いが、甲虫の良いコレクションの寄贈のご希望があれば、なるべく受け入れたいと思っている。ただ、新規受け入れをしたとしても、標本室にうずたかく積み上げるしかない歯がゆい現状をご理解いただきたい。本連載の世話人である倉敷市立自然史博物館の奥島雄一博士の言葉を借りると、「収蔵庫の限界に挑戦」するところである。



図1. 昆虫標本収蔵庫。A, 手前側, B, 奥。

本稿では、北九州市立自然史・歴史博物館に収蔵されている鞘翅目昆虫の標本について紹介する。1981年に国鉄八幡駅の駅ビルから始まって以来、北九州内外の多くの方々のご尽力により標本を収集し収蔵し、研究・教育普及活動に活用するに至っている。本稿では甲虫標本に関わった方すべてをご紹介することは叶わず、また紹介もわずかな言葉のみとなってしまう心苦しいが、これまでに当館の活動にご協力いただいた皆様に心より感謝を申し上げる。また、本稿執筆の機会を与えていただいた本誌編集委員の奥島雄一博士にお礼申し上げます。

コレクションについて

コレクションは大きく分けて特定分類群を扱ったものと、ある地域に生息する甲虫全体を扱ったものがある。大型のコレクションで特定分類群を扱ったものとしては、木元新作博士のハムシや、上田将人氏と磯貝島根氏のクワガタムシ、天野昌次氏のカミキリムシのコレクションなどがある。

木元新作コレクションはホロタイプを含む国内外のハムシおよそ4万点からなる大型コレクションである。主に研究で用いられ、国内外からの借用・閲覧依頼が多い。標本は主に中型ドイツ箱と

中型インロー箱に整理されている。上田将人コレクション(図2)はチョウとクワガタムシの大型コレクションで、クワガタムシは日本産種がおよそ1万点、外国産がおよそ千点からなる。福岡県内の膨大な標本を中心として、上田氏が採集・購入した全国津々浦々の標本が揃っている。上田氏の逝去後に記載されたものなどごく一部の種を除き日本産は種・亜種レベルで大部分がカバーされている。磯貝島根コレクション(図3)は世界のチョウとクワガタムシ合わせて2万5千点からなる。飼育繁殖が一般的になる前の大量の海外産クワガタムシ標本は価値が高い。コレクション中にはホロタイプやパラタイプが含まれ、19世紀の標本も存在する。日本産カミキリムシでは天野昌次氏のコレクションがおよそ1万点、出雲善浩氏のコレクションが大型ドイツ箱およそ30箱(図4、整理中)となる。双方とも受け入れ時点できちんと整理されていたため、日本産カミキリムシの全貌を見渡すことができる。

地域ファウナでは、福岡県の昆虫を広く収集した高倉康男氏のコレクション(全体でおおよそ4万4千点)には甲虫が多い(図5)。著書「福岡県の甲虫相」(高倉, 1989)のベースとなった標本のほか、タイプ標本も含まれ、福岡県の甲虫相を語る上で欠かせないものである。行徳直巳氏のコレクションは昆虫全体を広くカバーし、戦前・戦後の標本が全体で7万点に近い数となっている。行徳コレクションのうち、福岡県産水生甲虫については中島・井上(2009)のリストがあり、半世紀前の福岡県の水生昆虫の生息環境を示唆する重要なコレクションであることが示されている。これらのほとんどは当時の普通種であろう。珍しく貴重な種をしっかりと管理しつつ、価値が無いと言われがち



図2. 上田将人コレクション(2015年の特別展で展示したもの)。



図3. 磯貝島根コレクション(2015年の特別展で展示したもの)。



図4. 出雲善浩コレクション。



図5. 高倉康男コレクション（ジョウカイモドキ科、ヒコサンヒメジョウカイモドキ *Hypomixis hikosanus* (Takakura, 1988) のタイプが入っており、これはタイプ標本庫に収蔵する予定)。

な、今の普通種をしっかりと集めていくことの重要性が示唆される。雑誌「北九州の昆虫」の主筆者であった松田勝毅氏のコレクションは現在整理中で、北九州市とその周辺の甲虫およそ1万4千点からなる。

カプトムシ亜科は展示にも利用できるため、筆者が着任して以来コツコツと整理・収集して2015年の特別展で展示した。ここに名前が挙がっていない方（鱗翅目のコレクター各氏）も含め、おそらくは「教養として」各氏が所持していたカプトムシと、当館で収集していた標本がベースになっている。今のところ300種・亜種程度であるが、これはコガネカプトとクロマルカプトの沼にハマる手前であり、珍種も含まれてくるので費用対効果の面からもそろそろ限界である。この中には、日本で初めて正式に生きてまま輸入されたヘラクレスオオカブト（上田, 1997）から始まる、当館の生体展示で用いた歴代の個体も蓄積されている。

他に注目すべきものとして、渋谷卓コレクション（2,700点）には佐賀県周辺の標本に加え、東京



図6. イナバテナガコガネ（ホロタイプ）。

および周辺地域の戦前の甲虫標本が含まれており、当時の自然を物語る貴重な資料である。岡野喜久麿氏はチョウと書籍のコレクターとして有名だが、岡野コレクション中には岡野氏が記載したクロツヤムシのタイプ標本があるほか、国内外産のクロツヤムシや

オサムシも含まれる。

加えて、当館には2千点を超える昆虫化石のコレクションがある。ほとんどは不完全変態群の化石で、甲虫化石の数はごく一部となっているが、イナバテナガコガネ *Cheirotonus otai* Ueda, 1989のホロタイプ標本（図6）は甲虫屋として推したい。

全体的に見て、特に雑甲虫で未整理・未同定の標本が多い。また同定の再検討が必要な標本もかなりの数が残されている。加えて、例えばアオオサムシの個体数が（いままで発掘してきた限りでは）少ないなど、地方博物館だからこそその意外な盲点もある。

現状について

当館の標本庫は限界まで標本を入れようとしている状態であるため、整理しようにも、整理した後の標本を置く場所はない（甲虫は比較的场所を取らないため、一部はジェネラルコレクション化を画策している）。標本棚の上や床にはまだ積み上げるスペースがあるが、もはや時間の問題であるし、それは収蔵とはいええないと思う。そのため、コレクション内で完結する量を増やさない整理は可能なものの、分類群別の整理はもはや不可能で、種を対象にした依頼に応えることができないことも多い（特に鱗翅目は分散がすさまじい）。来館者にも「コレクションの山はここです」と積み上がった標本箱を指差すしかない場合もある。

人手不足から寄贈者のコレクションラベルが付されていない標本もかなりの数が残されている。コレクションラベルはあった方が良いが、他先進国と異なり、標本の管理や作製業務そのものが専門職としてみなされず、人手不足が解消される見込みがない日本の現状を鑑みて、今後は現実的な解としてコレクションラベルの要不要も十分に検討する必要があると考えている。担当者一人でコレクションラベル付けとデータベース化をするには、何度計算しても、数百年の寿命を可能にする技術革新が必要である。今後、特に地方博物館に標本を寄贈する予定の皆様は、できることならばコレクションラベル（必要なら）と一頭ごとと同定ラベル（特に重要）を付けていただければ幸いである。どこの博物館でも、残るのは一本の針に刺さったものだけで、標本とは別の種名ラベルはまず残らない（未同定標本として扱われる）と考えていただければと思う。適当な同定は良くないが、同定するのが人間である以上、同定ラベルに誤りはつきものである。どうか誤同定を恐れず、また普通種であっても同定ラベルをつけていただきた

い。同定ラベルは後生の人間にとって極めて役に立つことは間違いない。

また、予算の縮小は博物館においても例外ではなく、現状では館の予算の多くを展示のための費用と、バックヤードを含めた施設の維持管理費用が占める。今のところ当館では収蔵庫の空調を夜間のみにすることなど（温湿度に大きな影響が出ないことは確認済み）、大小様々な節約を行っている。なお、当館での菌虫害対策は燻蒸と侵入状況調査による。新規受け入れ標本、また収蔵庫から出した標本については殺虫・殺カビの燻蒸を行っている。全館を対象とした粘着トラップ調査を年に2回実施し、害虫の侵入状況を調べている。

利用について

研究目的の利用については国内外問わず幅広く受け入れている。他館でも同様と思われるが、収蔵庫には「標本」として思い浮かべられるものだけではなく、利用者の未発表標本（データ）や、希少種の詳細な産地データが収蔵されている。また、時には今後の展示で目玉として用いるため、戦略的に公開する予定の資料が置かれている場合もある。そのため、希少種データ目的の侵入や、何気ない一枚の写真であっても SNS などの勝手な流出はまずい。かといって、それを杓子定規に適用し、利用者の便を妨げたり、利用者の背後で私が仁王立ちし続けたりする訳にもいかない。そのため、論文業績の無い利用者や学生などによるタイプ標本借用や自由な標本の閲覧などは、指導教官などの保証人を必要とする場合がある。いずれにせよ学術研究目的の借用は、研究実施能力が論文などで示され、（標本に関する）悪名が高くなく、目的

がしっかりしていれば反対する職員はいない。

一方、展示目的の借用については、標本の破損や劣化のリスクが伴い、かつそのリスクが標本を貸し出すことによる当館のメリットを上回ることが少なくない。そのため、個体数や種によるもの、当館から借用しなければならない理由と目的が明確でない場合は、お断りさせていただくことが多い。

おわりに

標本の収集と保存は博物館の本質であり命である。標本の数と質は知識のようなもので、引き出しがあればあるほど、打てる手が多くなり、様々な場面へ応用が可能になる。加えて資料の収集・保存は一代限りのものではなく、世代を超えたものである。今あるものを有効に使うことは重要であるが、今あるものに乗せして次に残さなければ、先代の資産をただ食い潰した二代目社長になってしまう。当館は収蔵庫と新展示場の必要性を常に主張しており、「今は」当館の標本庫は満杯ではあるものの、これからも手を尽くしていきたいと考えている。

引用文献

- 蓑島悠介, 2014. 北九州市立自然史・歴史博物館の紹介. 昆虫と自然, 49 (2): 27-30.
 中島 淳・井上大輔, 2009. 行徳コレクションにおける福岡県産水生甲虫の記録. ホシザキグリーン財団研究報告, (12): 315-322.
 高倉康男, 1989. 福岡県の甲虫相. 526 pp. 葦書房, 福岡市.
 上田恭一郎, 1997. 「ママ、でもこれ小さい!」— 一生き虫輸入展示願末記—. TSUIISO, (902): 1-13.

(2019年9月1日受領, 2019年10月1日受理)

【短報】「山梨県におけるコガタガムシの生息状況 (岩田ほか, 2019)」の誤記の訂正と、本亜種学名の表記に関する覚え書き

本誌 33 号 p. 35-38 に掲載の表題の報文において、以下のとおり、本亜種の学名の誤記を含む 4 点の誤りが見つかったため、これらを訂正する。著者を代表し深くお詫び申し上げる。

また、この機会に各種文献を調べた結果、コガタガムシの亜種名と命名者、記載年について、いくつかの異なる表記のものが見られたため、覚え書きとして以下の 1. 2. の項に示した。

訂正に際してご助言を賜った林 成多博士（ホシザキグリーン財団）、本稿をお読みいただくとともに文献等の入手に多大なご助力のあった蓑島悠介

博士（北九州市立自然史・歴史博物館）、投稿時に多くの有益なコメントをいただいた保科英人博士（福井大学教育学部）に深謝する。

1. p. 35 コガタガムシ亜種名

“*cashmirensis*”と表記の文献（例えば、Bedel, 1891; Kuwert, 1893; Régimbart, 1902; d’Orchymont, 1932, 1934; Satô, 1965; 中根, 1970）と、“*cashimirensis*”と表記の文献（例えば、佐藤, 1985; 九州大学農学部昆虫学教室・日本野生生物研究センター（編）, 1989; 環境省（編）, 2015; 佐藤・吉富, 2018）が見られるが、Kollar & Redtenbacher (1844) の原記載、Hansen (1999), Fikáček *et al.* (2015) および Przewoźny (2019) に基づき、“*caschmirensis*”と訂正